



近世期信州下諏訪宿における助郷村の構造とその変貌

玉置, 哲郎

(Citation)

兵庫地理, 5:27-34

(Issue Date)

1958-09-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002216>



近世期信州下諏訪宿における助郷村の構造とその変貌*

玉置哲郎

※1956年秋に日本地理学会で発表したものに加筆訂正したもの

1. 序

近世街道の助郷村の研究には既に児玉幸多⁽¹⁾、大熊喜邦⁽²⁾、本庄栄治郎⁽³⁾、浅香幸雄⁽⁴⁾、矢島仁吉⁽⁵⁾、喜多村俊夫⁽⁶⁾、原沢文弥⁽⁷⁾、中野三男⁽⁸⁾の各氏などによって示されているが、特に下諏訪宿は山間部のため耕地面積も少ないので、労役負担が困難にもかゝらず、甲州街道と中山道の分岐点にあるうえに、中山道唯一の難所として知られる和田峠(1537m)と塩尻峠(7247.9m)とに挟まれていたという自然的条件から重要な宿場町として発達したのである。⁽⁹⁾ しかも現在は中央本線を基にして岡谷市、諏訪市と共に諏訪湖を取り囲まれた都市として発達しているという点からみて、交通史上からも助郷村の変遷を把握するために興味ある地域といえる。殊に本論で問題にするのは一個の助郷村の都市化への発展プロセスを追求することをさけ、あくまで助郷村全体の宿に対する労働力供給に因しての問題を地理学的に解明しようとする立場、すなわち純農村的集落の分野の動向に、特に重きを置き、宿方明細帳からそれぞれを論考した。

2. 宿駅の組織

寛政12年(1800)の宿方明細帳によれば当宿は脇本陣がなく「脇本陣御用之節は旅籠屋の内丸屋要四郎、検物屋直左衛門にて其時同役脇本陣為相勤候」と代役が設置されていた。

	寛政12年 (1800)	嘉永4年 (1851)	安政6年 (1859)
本陣	1	—	1
脇本陣	0	—	1
旅籠屋	42軒 ²⁰ / ₂	—	87
問屋	1	—	1
商人	37	—	2
諸幹線	212	125	195+2

表一
宿場形態

それに対し安政年間には検物屋が問屋になり、丸屋が本陣化して宿場役が完成した。⁽¹⁰⁾ (表一)人口の状況は寛政12年には総数741人で、内男子394人、女子347人、嘉永4年(1851)には総数569人、内男子324人、女子245人であるが、軒数は212軒から125軒と減少し、安政6年(1859)には再度195

軒以上と増加している。このように宿駅人数及び軒数は変動したが、特に旅籠屋数の変動は著しいものであった。寛政12年には大型、中型各々20軒で、小型を入れて42軒となり、更に安政6年にはその軒数87軒に上っている。これらは明らかに交通量の増加と共に宿駅の発展性を示しているものであるといえる。このような宿駅を支えている助郷村は元禄7年(1711)においては定助郷村24ヶ村、動高9609石で、大通行の際は定助郷の外、大助郷(数は不明)を動かし、定:大助郷の27000石と、それに諏訪上下大明神社領1500石、と加えて計28500石で動めていた。⁽¹¹⁾文久元年(1861)には定助郷24ヶ村で、元禄7年(1711)と同様に大助郷は83ヶ村をもっていた。従って宿駅の規模は一般的であるとみてよからう。⁽¹²⁾

3. 定助郷の位置

諏訪湖東部の才三紀層山地と湖南西部の古生層山地に囲まれた諏訪湖周辺(諏訪盆地)の集落群、即ち湖辺沖積地及び横河川扇状地などが下諏訪宿の助郷村であり、特に天竜川沿いの三州街道と甲州街道沿いにその多くが分布している。中山道沿いには

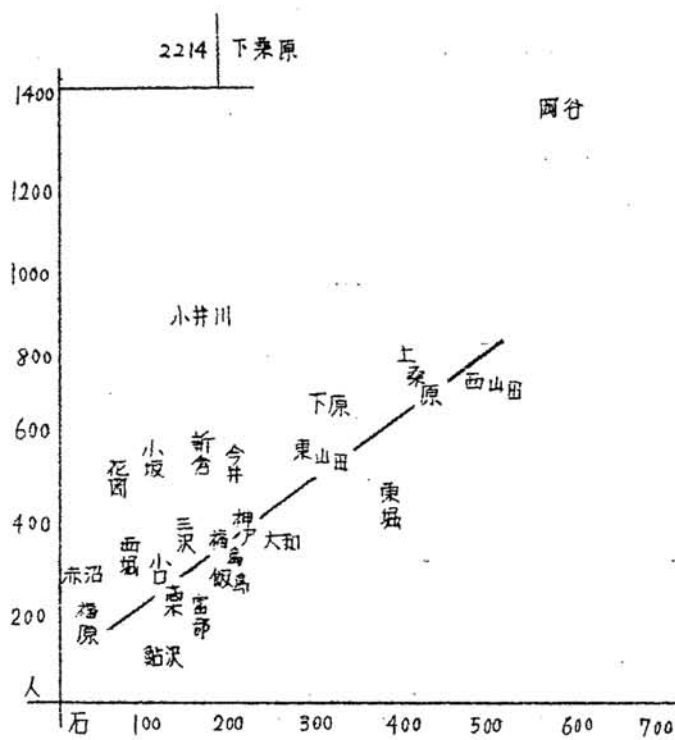
今井、栗山田、西山田、下原、東原、小井川の各村、三州街道側には西堀、小口、岡谷、花岡、橋原、三沢、新倉、駒沢の各村、甲州街道沿いには富部、高木、大和、下桑原、上桑原、神戸、飯島、赤沼、福島各村と湖南の小坂村で構成されている。これらの助郷村への当宿からの距離は湖西部の駒沢村へ8.5kmで概して8km~8.5kmの圏内の村々が宿駅を培養しているのである。(オ一図) この定助郷村の規模を知るために、文久元年(資料の関係上)の動高と人口の関係をみた。



オ一図 定助郷村の宿駅よりの距離
()の中数字は単位km)

4. 勤高と人口

定助郷村の各村毎の勤高と人口（文久元年）は一般的に比例的な数値が見出され、人口400人に対し、勤高200石位の村方が非常に多く（オニ表）規模も余り大きくない。



オニ表 勤高と人口相関々係

これらの平均値をもとにした図表は勤高が人口の割に少い村である下桑原村などで、これらは要するに農業外人口が相対的に多いか、または勤高と村高の同一の場合は耕地面積が少いか、いずれかの現れであると考えられる。一方その逆の勤高が人口より多い村などは純農村的であることが推察出来る。更にこれらを一人当りの勤高で吟味すると、勤高と人口相関にも表れたように純農村的な村落である鮎沢、東堀、富部、西山田村などは数値が大きくなっている。

（オニ表）それに対し非農民の多いと思われる村の数値は小さい。これによると助郷村の負担の濃淡が明確になると共に、総人口に対して負担の割合が軽いと認められる下桑原を始め、その他岡谷、赤沼、花岡、小井川、小坂、西堀、橋原村などは沖積地に多く分布していることがわかる。これらは耕地面積が広いと思われるのに負担度が低くなっている。これは封建体制の基盤ともいえる農業生産を維持するため、諏訪地方の主要農業地域における勤高を軽減した結果であるとみるべきである。これを裏付ける資料として勤高の時代的変遷を求めよう。

下原	0.45	花岡	0.14
東山田	0.51	橋原	0.19
西山田	0.62	鮎沢	0.67
東堀	0.74	新倉	0.29
西堀	0.18	今井	0.32
小井川	0.16	下桑原	0.054
小口	0.43	上桑原	0.51
大和	0.58	神戸	0.54
富部	0.6	岡谷	0.12
高木	0.46	橋島	0.49
三沢	0.38	赤沼	0.13
小沢	0.17	飯島	0.5

オニ表 一人当りの勤高（単位石）
文久元年

5. 勤高増減による地味の特性

各助郷村における勤高は年代によって大きな差異がある。これは地方経済の歴史的な変化を反映しているとみることが出来る。(表四表) すなわち元禄7年(1694)と正徳元年(1711)の17年間に下原村の勤高は約

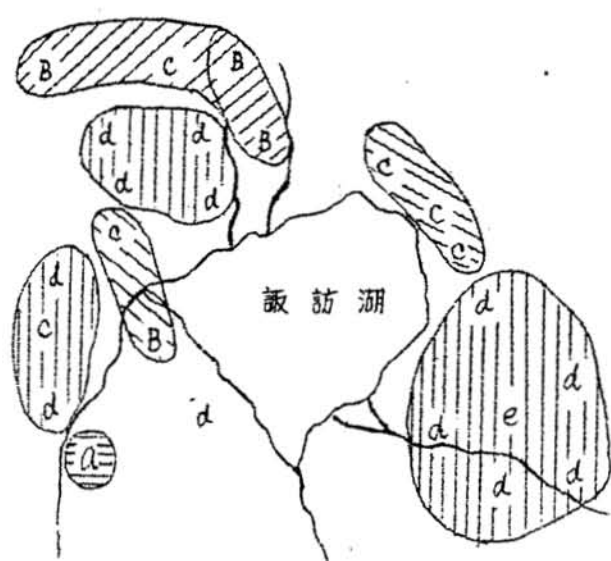
年代 助郷村	元禄(石)	宝永(石)	享保(石)	天保(石)	文久(石)	増減率
下原	318	315.998	—	—	298.6396	6%減
東山田	286	286	—	—	286	0
西山田	610	610	—	—	475.31564	22%減
東堀	954	954	—	—	375.74314	61%減
西堀	212	212.451	—	—	61.72293	70%減
小井川	605	605.65	—	—	144.0062	76%減
小口	402	402.8	—	—	102.8914	75%減
大和	320	320.6	—	—	221.1378	30%減
富部	219	219	—	—	130.08752	41%減
高木	226	226.5	—	—	120.20797	47%減
三沢	253	253.8	241	298	126.7416	48%減
小坂	208	209.5	—	—	100.59527	53%減
花岡	81	81.345	—	—	79.47419	3%減
橋原	106	106.04	133	134	39.14694	63%減
鮎沢	65	65.3	108	112	104.6475	60%増
新倉	427	427.673	417	417	166.1247	61%減
今井	165	165.33	—	—	176.3645	6%増
下桑原	619	1192	—	—	186.70494	60%減
上桑原	1116	1116	—	—	408.3278	64%減
神戸	440	440	—	—	210.30527	53%減
岡谷	803	803.912	—	—	577.90237	25%減
橋島	378	378.8	398	503	174.0252	56%減
赤沼	398	398.8	—	—	31.6596	93%減
飯島	397	397.41	—	—	156.79357	60%減

表四表 勤高及び勤高増減率

2石減、西堀村の4斗5升1合増、小井川村6斗5升増、小口村8升増、小坂村1石5斗増、花岡村3斗5升5合増、橋原村4斗増、鮎沢村3升増、新倉村6斗7升3合増、橋島、赤沼村8斗増、飯島村4斗1升増で、下原村の2石減以外はすべて1石以内の増加

にとどまって、殆んど大きな変化はないとみてよい。但し下桑原村のみは577石の増加となっているのは例外である。享保、天保年間の資料は部分的で比較できないが、三沢、新倉両村は享保年間に減少し、天保年間には新倉村を除いて増加している。そしてこれらは宝永年間に上回る数を示している。即ち天保年間には著しい交通量があったことが伺われ、そのため助郷負担が甚だ重かったものと推察される。助郷負担については交通量の増大の結果によるが、必ずしもそれのみでなく、実際には駅の労役をなすべ

く助郷に転嫁せしめたこともあることを付言する。隣宿の和田宿でもこのような助郷疲弊によって、弘化4年に貢担軽減の陳情を行い許可されている例⁽¹³⁾もあり、当宿でも同様な状態がみられたのであろうが、文書がないため確証できない。しかしその現れとして文久元年の動高をみると大体の推察が出来る。これによると全般的に減少の一途をたどっていることである。(勿論増加しているものも若干ある) この増減関係から貢担度の高低を知るため、元禄年間の動高と文久元年のそれとを比較して、増減率を求めた。この結果軽減数の大なる村と、その反対に動高の増加がみられる村方は助郷貢担の大なることがわかる。前者は労役貢担の過剰による軽減であり、後者は他の助郷村における労役軽減をうめあわすために、新たに労役貢担を増大したものであると考えられる。これら増減率をA, B, C, D, Eの五種に分類して、Aを+10石、Bを+10石~-10石、Cを-10石~-49石、Dを-50石~-80石、Eを-80石とすると、増加するものは鮎沢村(60%)、今井村(6%)、変化のないもの東山田村、減になるものは赤沼村(93%)を始め下原(6%)西山田(22%)東堀(61%)、西堀(70%)小井川(76%)、小口(75%)大和(32%)富部(41%)高木(47%)三沢(45%)、小坂(53%)花岡(3%)橋原(63%)新倉(61%)下桑原(60%)上桑原(64%)神戸(53%)岡谷(25%)福島(56%)飯島(60%)である。助郷村の全般的な形態をみるため前述の方法によって増減率の分布を(オ二図)をみると(A)の鮎沢村(60%)が最も大きい増加率をもっている。これは



オ二図 動高増減率の分布

これは天竜川峡谷部集落でもあり、また8kmの距離をもつ自然的条件によって他村の労役軽減に伴い新次の増加を示したものと見做される。(B)の岡谷、東山田、下原、今井、花岡各村の村落位置は概して山麓地帯に存在しており、耕地面積が少ないため生産高も大体一定していると考えられるので減少が少く、変化が少ないという結果があらわれている。(C)は一般的形態である。(D)は減少率が割合多く、この分布は沖積地に集中

しているため農業に専業していることがわかる。(E)の赤沼村は減少率93%であるが、文久元年の勤高、人口相関々係と対比すれば橋原、西堀村と類似的な位置を示して居り、過去に相当な負担がかけられたものと推察できる。このように種々な地域的差違によって勤高の増減が見出される。御伝馬勤人口率は各村共に全人口の13%の割合をもつてをり、殆んど条件は同一である。しかし駒沢村のみが13.5%を示しているのは60%の勤高の増加の裏付けとみてよい。

以上のように助郷村の機能は、その地域の特殊性を反映していることが推察されたが、文久元年の全般的な減少でなく、宿課役の政治的、経済的な圧力による反作用であると考えられる。

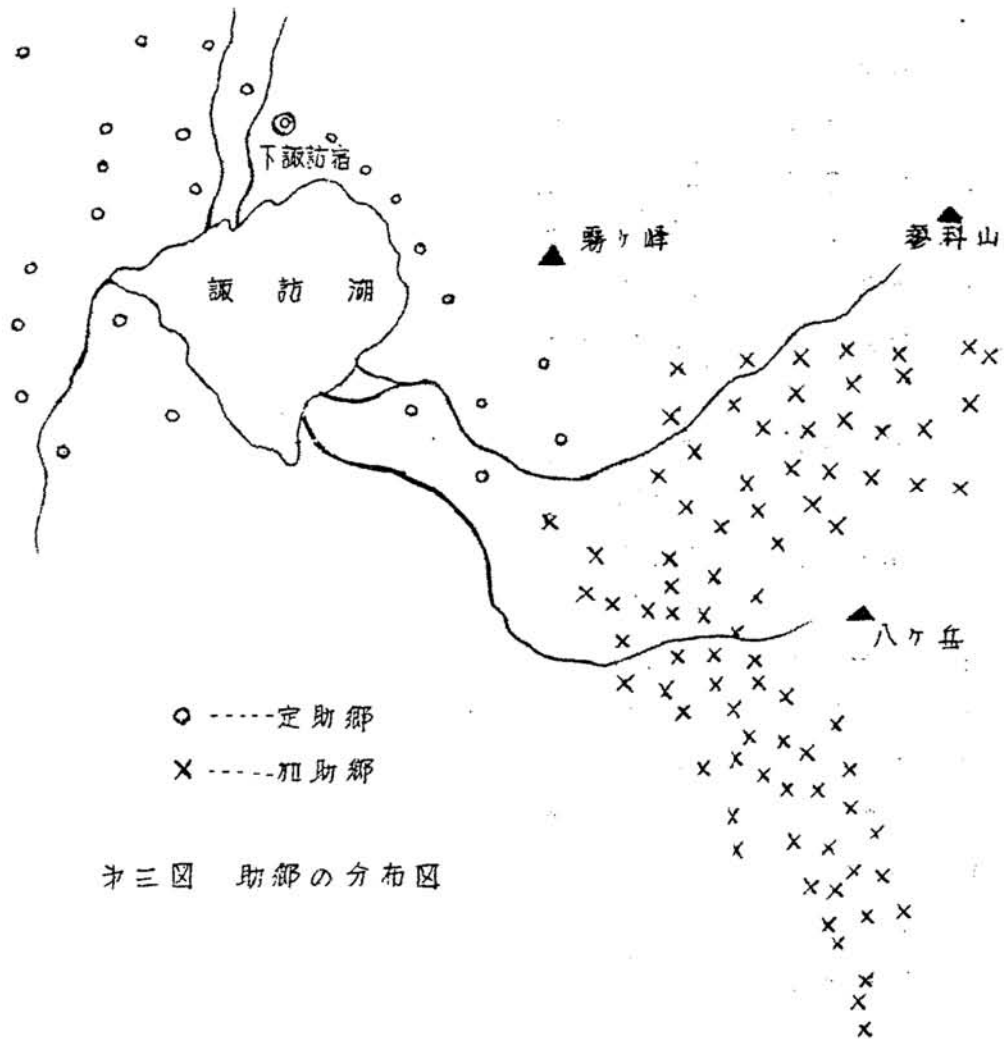
6. 定助郷と加助郷

享保6年道中奉行寛橋唐守が上申した助郷人馬用法陳述書に「助郷人馬を便役するには、先ずその駅に備うるところの常備人馬を使い盡し、その不足量を定助郷に課し、なお不足する所は大助郷に課す。また助郷人の募集は公私領の別なく出さしめる。定助郷の課役は100石毎に馬34、人夫56人で、それ以上は増大助郷に課す」とあり、この制度からみれば宿機能に助長する定助郷村と定助郷の課役不足を補う加助郷の二種があげられる。しかし享保10年にこの制度が廃止され、それ以後には加助郷村は定助郷村の疲弊に伴ない、それを補う村としての存在になったり、また非常御用の手段のために動かす場合など、種々の要因に基いて設定されている。(14)

本村の加助郷83ヶ村は八ヶ獄西南部山麓溪口地域及び蓼科横岳西南部溪口地域の沖積地に、その分布がみられており、助郷立地の特殊性がみられる。(才三図)そしてこれらが定助郷村と共に宿機能の一助としての労力の供給を行ったのである。

7. むすび

以上を要約すると下諏訪宿定助郷村の労力供給は江戸時代中期より後期の初めに至るまで特に大きく、労力供給の拡大期を構成し中期末には、その極度に達し、最盛期を示している。これはその時代の交通量と、その役にもたせている疲弊を物語るものであり、江戸末期の衰退期を発生させる要因ともなっている。中でも文久年代に各助郷村共(一部を除いて)相当の勤高減少があったが、純農村的な助郷村は特に減少率が高く、このため一人当りの勤高が多い関係を顕著に表わしている。



オ三図 助郷の分布図

例えば下桑原村（文久年代には一人当り勤高 0.084 石）岡谷村（文久年代では 1 人当り勤高 0.12 石）などで、この現象は江戸末期（文久年代）に封建的経済性の一環としての農村の政治的・経済的勢力が増大して農村的勢力が発達したものである。更に近世農村勢力の増大は、幕府の政治権力に対抗する現れであり、地方経済の中心としての宿機能に大なる影響をあたえた。

従って宿経済の再建のためには、必然的に定助郷村を除く他村（遷村）に労働供給を得なければならない結果となった。このように近世宿取への労働力供給圏は定助郷として宿取の近村（8～8.5 km）から近世末期には、その距離（20～30 km）にまでも拡大されたのである。

なお本研究に始終御協力をいただいた下諏訪市教育委員会小松泊教育長を始め諏訪神社春宮の宮坂氏に深く感謝の意を表したい。

(註)

1. 児玉幸多 中山道追分宿の成立と構造
学習院大学政経学部研究年報 I
2. 大熊吾邦 本陣の研究 丸善 1942
3. 本庄栄治郎 日本交通史の研究 改造社 1929
4. 浅香幸雄 近世期における宿付村落の発達 人文地理 8巻4号
5. 矢島仁吉 徳川時代上州安中宿に於ける助郷課役と農村人口との
関係 地理評 16巻2号
6. 吾罗村俊夫 宿駅の培養園としての助郷の研究 (近江経済史論攷
P.181~P.229) 1946
7. 原沢文弥 中仙道坂本熊谷間10宿の宿駅の規模 新地理
2巻3号
8. 中野三男 中山道沱馬、本山西宿助郷出入 信濃 8巻3号
9. 拙 稿 中山道の特殊性 地理と厂史(帝国書院)1巻1号
10. 宿方明細書上帳 寛政十二申年
11. 御證文 元禄七戌年二月
12. 吾罗村俊夫 註6と同じ
13. 人馬難渡に付代助郷相願差村 弘仁二年
14. 本庄栄治郎 註3と同じ